臨床実験報告

興味ある腰痛の一例

A Case of Low Back Pain

日本医科大学整形外科教室 (主任 齋藤一男教授)

井 出 正 彦
Masahiko Ide

(本論文の要旨は第 202 回整形外科東京地方会に発表した。)

脊椎逸出症の自覚的主要症状の一つとして腰痛が挙げられるが高度の第Ⅳ腰椎の前方逸出をレントゲン撮影像上で認めながら患者の主訴たる腰痛が本症とは関係がなかったと考えられる興味ある一例を経験したので報告する。

症 例

主訴…腰痛

家族歴…父親が胃潰瘍で死亡せる以外には特記すべきものはなし。

既往歴…妊娠回数三回の内最後の一回が流産、二児の分娩はいずれも正常であつたが第一回目の妊娠時即ち約 20 年前に左上肢の神経痛に罹患せる以外には生来健康であつた。

現症歴…約 1 年前より何等誘因と思われるもの無く朝起床時左大腿後面より臀部に掛けての牽引痛があり、次第に両下肢に迄及び痛みも一日中続き特に右下肢の屈曲時に増悪するも歩行には特別の障害は無く、

其の後は特別の治療も行わなかつたが次第に右下肢痛は軽快、左下肢痛のみとなつた。しかるに約 2 ヶ月前より腰痛 (特に腸骨後上棘の臀筋附着部並に腸骨櫛下方臀中部) が加わり次第に増強するに及び来院、第Ⅳ腰椎逸出症の診断のもとに入院した。

現症並びに経過…体格、栄養中等度、軽度の貧血がある以外全身状態は概して良好、第Ⅳ腰椎部に相当して高度の階段状陥凹が認められ、腰痛は歩行並びに下肢屈伸運動による変化はない。左下肢痛があり、左大腿後面に於て圧迫に対し過敏な点が証明されるが他に感覚障害は認められない。足間代、アヒレス腱反射陽性 (特に左側亢進) を認める他には病的な反射は認められない。レ線写真上にては写真Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの如く、第Ⅳ、Ⅴ腰椎の高度な前方逸出、第Ⅳ、Ⅴ腰椎中央部以下に脊髓腔管の閉塞像が認められる。なおこれ等々のレ線像はコルセット着用後 2 ヶ月半の自覚的症状の全く消失せる時期に於ても同様であつた。

入院後 2 週間の斜面台による牽引をこころみたが前述自覚症状中の下肢牽引痛が稍々軽快した以外には何等効果は認められなかつた。然るに約半年前より不正

性器出血並に凝固血液の混入、稍々悪臭ある帯下の有る事より産婦人科にて診察の結果、子宮腔部癌の診断の基に腹式広汎性子宮全別除術を受けた。手術時主要

所見としては子宮の周囲特に右側は纖維性の癒着が認められ、更に周囲結締組織に硬結を触れ、なお第Ⅳ腰椎部は甚しく前方に突出していたが腫瘍によるものとは思われなかつた。又本手術に際して腰椎麻酔は効果がなかつた。

組織標本より初期扁平上皮癌であつた。術後はもっぱら婦人科的治療を受けて居つたが自覚的症狀は消失、前述他覚的症狀は入院時と変わらず更に術翌日より左臀部に發生せる潰瘍を残すのみとなつた。

退院後3週間はコルセット無しで又3週間はコルセット着用で深部治療並に潰瘍の処置に通院せしめるも自覚症狀は無く、その後2ヶ月後の症状も手術後と全く同じであり、左臀部の潰瘍も相変わらず治療の傾向は認められなかつた。

考 案

脊椎逸出症の自覚的症狀の主なものとして歩行、作業時に増悪する下部腰椎及び仙椎部の疼痛並に歩行障碍等が挙げられるが、本症の腰痛の原因については一般に該部に於ける骨、関節、靱帯、筋肉等の圧迫又は牽引によるもので又脊椎の不安定に対する腰部筋肉の過度緊張もその一因と推定されておるが、神中、東氏によれば脊髓腔狭窄の為に馬尾神経の間歇的な圧迫、牽引の器械的刺戟による炎症を認めており、陳氏は脊椎逸出症の全症例に弓間黄靱帯の肥厚による馬尾神経及び神経根の圧迫を認め、手術的にその切除を行い腰痛の消失を見これが腰痛の主要原因となりとして居り、又近藤氏等は脊椎逸出症の全症例に椎体後縁隆起を認めこれが腰痛並びに坐骨神経痛の原因として居

る。私の集め得た特に第Ⅳ腰椎逸出症の全症例に於ても他覚的神経狀の記載のないものはあつても自覚的症狀たる腰痛の記載はあり、私の症例に於ても臨床的並にレ線上より第Ⅳ腰椎逸出を認め、当然逸出による腰痛並に諸症狀と考えていたものが子宮癌手術後他覚的諸症狀は術前と変化なく自覚的諸症狀のみが全く消失せる症例は稀有なるものと考えられる。本症例より推定すると Meyer-Bürgdoff (1931) の云う脊椎逸出症に見られる所の自覚的な症狀は脊髓又は神経根の圧迫に関係するものでないと言ふ説が一応うなずけられるなお本症例に於ては脊椎分離像を確実には認める事が出来ず、又脊椎逸出症の發生原因についての諸説が挙げられるが本症例に於ては全く外傷を否定しておる。

稿を閉じるに臨み、御校閲の勞をも惜しまれなかつた恩師齋藤一男教授に対して衷心より深謝し、又直接幾多御教示下された伊藤整形外科助教授に感謝の意を表する。

主要参考文献

- 浪越：日整会誌，3，137
神中，副元：日整会誌，4，145
本山：日整会誌，5，81
神中，東：日整会誌，7，579
陳：日整会誌，17，498
Albec：J. Bone and Joint Surg. 9~427
Burchhardt：Dt. Z. Chir. Bd 232
Bernhard Simons：Röntgen Dyagnostik d. Wirbelsäule
Walther Müller：Pathologische Physiologie der Wirbelsäule，p 252

各種胎盤物質の各種臓器に対する作用の異同に就いて

日本医科大学第二産婦人科教室（主任 真柄正直教授）

本間公平 鷗浦士朗 大村 清
Kohei Honma Sirō Unoura Kiyosi Ōmura

稲垣恵三 土田正美
Keizō Inagaki Masami Tutida

緒 論

1933 年来、真柄等は妊娠中毒症の成因に関し研究

中、妊娠中毒症は出産或は妊娠を中絶することにより
輕快治癒する所から妊娠中毒症の原因は胎盤によるも